

く一念三千の法門なり。しかれども蜜印と真言等の事は法花経かけてをはず。法花経は理秘密、真言の三部経は事理俱蜜なれば天地雲泥なりとかゝれたり。しかも此の筆は私の積にはあらず。善無畏三藏の大日経の疏の心なりとをぼせども、なをく二宗の勝劣不審にやありけん。はた又他人の疑をさんぜんとやをぼしけん。大師慈覚也の伝云、へ大師二経の疏を造り、功を成し已畢りて心中に独り謂らく、此疏仏意に通ずるや否や。若し仏意に通ぜざれば、世に流伝せず。仍りて仏像の前に安置し、七日七夜深誠を翹企し祈請を勤修す。五日の五更に至りて夢みらく、正午に当りて日輪を仰ぎ見て、弓を以て之を射るに、其の箭日輪に当りて日輪即ち転動すと。夢覚めての後深く仏意に通達せりと悟り、後世に伝うべし等云云。慈覚大師は本朝にしては伝教・弘法の両家を習きわめ、異朝にしては八大徳並に南天の宝月三藏等に十年が間最大事の秘法をきわめさせ給る上、二経の疏をつくり了、重て本尊に祈請をなすに、智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうちをどろかせ給、歓喜のあまりに仁明天皇に宣旨を申そへさせ給、天台座主を真言の官主となし、真言の鎮護国家の三部とて、今に四百余年が間、碩学稻麻のごとし、渴仰竹葦に同。されば桓武・伝教等の日本国建立寺塔、一字もなく真言の寺となりぬ。公家も武家も一同に真言師を召て師匠とあをぎ、官をなし寺をあづけたぶ。仏事の木画の開眼供養は八宗一同に大日仏眼の印・真言なり。

疑云、法花経を真言に勝と申人は此積をばいかんがせん。用べきか又すつべきか。答、仏の未来を定云、へ法に依りて人に依らざれ。竜樹菩薩云、へ修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざる

は黒論なり。天台云、復修多羅と合せは録して之を用う。文無く義無きは信受すべからず。伝教大師云、仏説に依馮して、口伝を信ずること莫れ。等云云。此等の経論積のごときんば夢を本にはすべからず。たゞついさして、法花経と大日経との勝劣を分明に説たらん経論の文こそたいせち候はめ。但印・真言なくば木画の像の開眼の事此又をこの事なり。真言のなかりし已前には木画の開眼はなかりしか。天竺・漢土・日本には真言宗已前の木画の像は、或は行、或は説法し、或は御物言あり。印・真言をもて仏を供養せしよりこのかた利生もかたく失たるなり。此は常の論談の義なり。此一事にをひては但し日蓮は分明の証拠を余所に引べからず。慈覚大師の御釈を仰て信て候なり。問云、何にと信ぜらるゝや。答云、此夢の根源は真言は法花経に勝と造定ての御ゆめなり。此夢吉夢ならば慈覚大師の合せさせ給がごとく真言勝るべし。但日輪を射とゆめにみたるは吉夢なりというべきか。内典五千七千余卷、外典三千余卷の中に日を射とゆめに見て吉夢なる証拠をうけ給るべし。少々これより出申。阿闍世王は天より月落とゆめにみて耆婆大臣合せさせ給しかば、大臣合云、仏の御入滅なり。須拔多羅天より日落とゆめにみる。我とあわせて云、仏の御入滅なり。修羅は帝釈と合戦の時、まづ日月をいたてまつる。夏の桀・殷の紂と申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国をやぶる。摩耶夫人は日ははらむとゆめにみて悉達太子をうませ給。かるがゆへに仏のわらわなをば日種という。日本国と申は天照大神の日天にしてましますゆへなり。されば此のゆめは天照大神・伝教大師・釈迦仏・法花経をいたてまつる矢にてこそ二部の疏は候なれ。日蓮は愚痴の者なれば経論もしらず。但此の夢をもつて法花経に真